日伯コドモ新聞

日伯新聞附錄
伯國聖市マエストロ・カルヂン街一一〇九
（ヴエルゲイロ二五八）
發行所　日伯新聞社
【毎週一回發行】

誰も相手にならず 蔣介石は一人ぼつち

心ある人々はみな和平へ

抗日派や共產黨系のために引きずりまはされ乍ら、どこまでも抗戰をつゞけつゝある蔣介石も、今ではまつたく身動きもならず惱み狂つてゐますが、一方これと反對に國を思ふ心ある人々は次第に和平を叫び、誰一人蔣介石と一しよになつて、戰爭をしやうと云ふものはありません。

わが爆擊におびえ 重慶は全く死の街

絕えまないわが荒鷲のばくげきにおびえきつた重慶は、いまは全く生きた心地もなく學校などは郊外に移し、街の人々はそく〳〵と田舍の方へ逃げ出す有樣で、全市はさながら死の街と化してゐます。ことに汪精衛のゐないあとはいろ〳〵なデマが飛び、日本の飛行機は支那の都會といふ都會は全部壞滅するさうだといふことを云ひふらす者さへ益々多くなつてゐるさうです

サンパウロ市 創立記念日

一月廿五日は今のサンパウロ市の地に始めて家もしいものが建てられた日なのです、それは今から丁度三百八十五年前の事でした、ポルトガル本國からブラジルを治めるやうに命令を受けてバイアに到着したトメ・デ・ソウザ總督と一緒に來た十數名の神父の中の一人アンシエータ神父が土人（チピリツサ族）ばかりの一校とつけたので、その名がサン・パウロ學校とつけたので、その名が今に傳はりサン・パウロ市と呼ばれて來たものです

（サンパウロ近郊一帶の高原）にはるゝ〳〵やつて來て今の州政廳の在る所、ラルゴ・ド・コレヂオに學校を建てたのです、その名をサン・パウロ學校とつけたので、その名が今に傳はりサン・パウロ市と呼ばれて來たものです

「あらわし」のともだち

ひかうきち〇〇では、りくぐんの〇〇かうくうたいの、へいたいさんたちが、ちかくでとらへた　とりやいぬなどを　かはいがつてゐます。

ブルドツクのどらうさん、たかのピヨちやん、ぶたのトンちやん、などは、まるで　どうぶつゑんのやうです。

どらうさん　といふなは、せんしされた　たいゐんのしつてゐたかしこいいぬのなを　おもひでのために　とつたものです。やさしいこゝろではありませんか。

ピヨちやん、ミーちやん、のなは、そのなきごゑからとりトンちやんは　ぶたを　トンとよむからです。

たかのこどものピヨちやんは　はなしがひでごちそうも　てのうへにきて　たべます。どらうさんも、ミーちやんも　たいへんなかよしで　一つなべでたべてゐます。

しやしんのたかはピヨちやんの　おとうさんで　ピヨちやんといつしよにあそんでゐます、おとうさんのなはワシくんですがいつもひかうきにのつて　てきのぢんちにまでゆきます。

馬は甘い物が好き

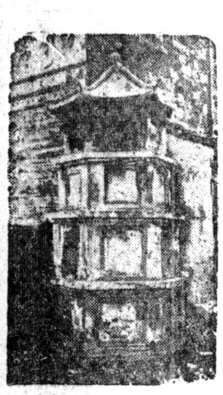
▽……よく働いた馬には藁をきざんだものに小麥のふすま、大麥、小麥、燕麥などをまぜあはせた御馳走を食べさせ、遊んでゐるときには、あまり深養になるものをとりすぎると病氣になるので、おもに乾草などをやります

▽……それからよく人蔘をおやりになりますが、人蔘よりもなほ好物はみなさんと同じやうに甘いものです。軍馬はよくはたらいた御褒美には那麻糖をかためた愛馬糖といふお菓子をもらひます。

樂書の大將・蔣介石

支那の子供は文字を尊びます

面白い燒寫字塔の話



支那の學校と都會の街角には きつと高さ三メートルばかりの、六角型の塔がつくられてゐます。これは燒字塔、くはしくいふと燒寫字塔といふものです。

○……○

文字の國支那ではとても文字を尊びます。どこの學校へいつても、またどこの便所へはいつても樂書などは藥にしたくてもみられません。どの通りをあるいても文字のかいてある紙切は一枚もすてられてゐません。そのくせどんな田舍にいつてもイヤといふほどみせられるのは壁にかいた蔣介石の新生活運動の標語か、中央軍の「擁護蔣委員長」といふセンデン文字ばかりです

だから蔣介石は日本軍に反抗するばかりでなく、支那ではじめて樂書をした男、文字に反逆した男です。

○……○

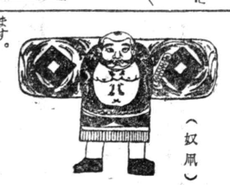
それはとにかくとして、支那では字をかいた紙は一體どうするか？日本人ならばさしあたりハイブツ利用といつて、さつそく塵紙代用につかふでせう。おもしろい話では、支那人にばけた日本人が、字をかいた紙でハナをかんだりなどすると、たちまちバケの皮がはげて日本人だといふことがわかつてしまひます。ふうしたことはよく耳にする話です。ところが支那では、字をかいた紙はかならずひとつ所にあつめこの六角の塔のなかで火をつけてやいてしまふのです。

昔からの凧漫談

東洋でも西洋でも起源は古く
軍用にも使つた

日本の一月といへば冬の一番寒い時です。「凧、凧、あがれ、繪凧に字凧、天まであがれ」と、子供は冷たい風の吹く中で男まして凧をあげて遊び白い話があるので、けふはそのお話をしませう。

（とんび凧）


（奴凧）

皆さんもきつとお好きでせう、凧についてはいろ〳〵所があります。

たこの起源は大變古い

日本で凧揚げが初めて行はれたのは約九百五十年前といふ事です、が西洋では紀元前四百年ギリシヤで哲學者プラトーの友アルタスが凧をつくつたのが歴史に乗つてゐます支那では漢の高祖の時代に胯くぐりの美談でお馴染の韓信といふ人が朱央宮を攻めた時

（凧の那支）

朱央宮までの距離を測るため公高く凧を揚げたと記錄されてゐます、かうして軍にも使はれたので男子の健康を祈るといふやうに考へられて來ました。

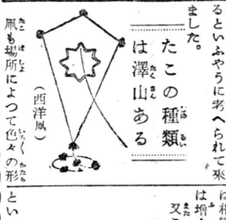
（凧助額）

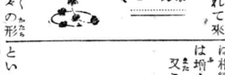
（凧角六）

たこの種類は澤山ある

（西洋凧）

凧も場所によつて色々の形があります、東京地方の四角凧、奴凧、眞四角凧、伊豆半島の鎌凧、名古屋、濱松地方のアブ凧、大阪の扇凧、袖凧、四國地方の德島奴、長崎の夢凧、千葉方面のトンビ凧等々と數へ切れない程あります今年は聖戰下の物資節約のために凧も紙、竹、繪具が節限されてゐるのですが、子供は相變らず凧が大好で賣行きは増えるばかりですと又これらの凧の外に凧合戦といつて五メートルも直徑がモタチハ、マイニチコヨトホルタビニ「ヘイタイサン、アリガタウ」トオレイヨイフノヨワスレマセン。コノシヤシンハ、チユウザンモンデ、オカアサントイツシヨニヘイタイサンニ、アイサツシテイルトコロデス。


（凧扇）


（凧機行飛）

シナノコドモト
ナカヨシノヘイタイサン

ニツポンノ　ヘイタイサンハ　ドンナニオソロシイヘイタイダラウト、ハジメ、コワガツテキタナンキンノコドモハ、ヘイタイサンガ　コドモニ　ヤサシイノデ、スツカリナカヨシニナツテキマスネ　ネンマヘニハモノスゴイゲキセンノアツタ　チユウザンモンノアタリモ、スツカリヘイワニナツテ　コドモ

無電通信士の知られぬ苦勞

戰線からのニュースはかうして早く運ばれる

漢口へ日本の兵隊さんが躍りこんだ！それから七分後には日本内地の各新聞社にその記事が届いたのです。この七分は事變始まつてからの新記錄ですが、どうしてそんなに早いのでせうか。これは完璧した無電のおかげです。

此の無電を取扱つてゐる通信士の苦勞は並大抵のものではなく通信士は送信機を背負ひ受信機を手にさげ、十數個の乾電池を三人の運搬員がふりわけに早いで兵隊さんとともに行軍します。無電機はぬれると駄目になるので雨の日は裸になり機械や電池を包みます。一日五十キロ歩いてへとへとになり、水牛の背中に積んだ所が水牛は水が好きなので水に飛込むのでためだったり、牛はといへばのろいし、騾馬も暴れて積んだものを振り落すので結局は人間が運ばなければ駄目なので通信士は機械を子供のやうに可愛がります。南京攻略戰の時には朝日新聞紙上の無電は自動車と一緒に地雷にやられ、大場鎮では卅分間に機械の周圍に百五十發も彈丸がきたといふのですからそれこそ命がけです。

又、通信をはじめると支那軍が同じ波長で妨害したりするので、その苦勞は一通りではありません。新聞紙上の一字一句にもこんな決死的活躍が織りこまれてゐるのです。

照宮さまの聽召された

童話「鹽賣仁吉」（5）

岸邊福雄（謹述）
（さし絵）川島はるよ

仁吉が川をのぞいてみますと、今まで淡水であつたところへ、鹽が二俵も投げ込まれたために、急にしほからくなつたのでせう、川底にゐた魚が驚いて、川の面にポカ〳〵と頭を出しました。

それを見た仁吉は足の怪我も、川の深い淺いのも忘れて手早く鹽俵を取り上げると、ザブザブと川の中に飛び込んですくひ上げました。するとどうでせう、そのお魚は鯉です。しかも大きな鯉です。

「鯉だツ」

と仁吉は、思はず、大きな聲を上げました。

先ほど、仁吉にさやうならをいつて、帰つていつた、市男と花子は後の川から大きな聲が聽えましたから、振り向いてみますと、仁吉が川に浚ちてゐます。驚いた兄妹は、「花子、仁ちやんが川に落ちたヨ。助け舟だ。……おおい仁ちやん、今行くヨオ」と、一足飛びに土手へ駆けだして、川にいつてみますと、仁吉は氣狂ひのやうになつてカバ〳〵網に魚をすくひ込んでゐます。

「市男さん。鯉なんです。この鯉をお母さんにあげたら、きつとお母さんのそつちの肩をもつて、ちやんのそつちの肩をもつておあげ、兄さんはこちらを引張つて上げるから……いゝかそれソーこの三……仁ちやん良かつたネ、大きな威勢のいい鯉がゾ……これは神様が、上から掬の下まで、力一杯しぼりました。自分の新らしい紬麗な着物の汚れるのに、少しも氣のつかぬやうでありました。

仁吉は、嬉しさに滿ちみちて、只ぼんやりと立つてゐました。

市男は、その鯉の取れたのを、自分の喜び事のやうに喜んで、

「仁ちやん、よかつたね……僕もうれしいよ、よかつたね……僕ねッ、君のお母さんにネ、仁ちやんは威勢のいい鯉を取つたからつて、大急ぎで知らせて來るから、君は急がないで帰つて來給へ。」

市男は、妹をつれて又駆けだしました。そのうしろ姿を見送つてゐました仁吉は、パタと道に坐つて

「市男さん、僕はけふの嬉しかつたことは一生忘れません大きくなつて、きつとこの御恩をお返しいたします。」

と道に両手をつき頭を土につけんばかりにして、お禮を申しました。

◈　◇　◇

急ぐ兄妹は、そんなおじぎなどは少しも知りません。家に家にと駆け稜けました。

仁吉は、もう足の痛みも忘れてしまひました。ぬれた着物の冷たいのも氣がつきません。一つの籠に鯉を入れ、一つの籠で蓋をして、しつかりと結んだ紐に、竹の棒を通すと、元氣にポイツと肩にかけました。

「この鯉を、お母さんに上げたら、目が開くかしら……」

とうたがひましたが、すぐ

「開くといいナ」

と、心の中で神様にお願ひをしました。それから

「きつと開く。」

と、お願ひが必ず叶ふ事に きめると、道々口笛まで吹きながら、浮いた足どりも嬉しさうにイツ〳〵と我家を指して帰つて行きました。

・　・　・

▼三等入選作品

農家の心配

グワラ、ベス日本人小學校第五學年（十二歳）　高橋サワ子

私達一家は、今グワラ、ベス市附近で農業をやつて居る者であります。今は色々な作物の畔付中で録日々雨の降るのを待つては畔付けしてをります。早いのはもう柔かい芽を出して、父母を喜ばして居りますが、又心配も一方ならぬ樣です。もう久しく雨が降りませんので、日中にはしをれてをる所もあります。

昨年一昨年と二年續けて不作をした私の家では、今年も又氣が氣でありません。昨年は稲の出穂に雨が降らず、出る穂出る穂が皆白穂であつた時の父母の心配は夜の目も眠られぬ位でした。脊丈程も伸びて一抱へもある稲が皆、白い頭を出した時は、子供の私達までがどんなに雨を待つた事でせう。

「今雨さへふれば」と言はれる父母の聲を聞く度に、心の中に「どうぞ神樣雨を下さい」と祈つたものでした。そして學校に行つてゐても一寸でも雲が出ると、あゝ雨がふるのではないかと空ばかり仰いでをりましたが、たうとう雨はふらず、四アルケールの稲が全部白穂ばかりで白波を打つたやうになつてしまひました。父はこんなことは生れて五十數年初めてだと言つてその白穂を一抱もある程取つて來て、こんな事もあつたと言ふ記念にと藏つて有ります。

百姓でなければ分らぬこの苦勞、一年の間汗水流して働いたのが皆全滅した時の母の悲觀は、私達を心配させる程でした。今年も又畔付時期になつたが、雨が順調に來てくれゝば良いが、若し昨年の樣な事があつてはと、父も今から心配してをります。

雨の次にもう一つ父母を心配させるのはあの蝗です。棉天候や、害虫が、私達の思ひのまゝにならない限り農家の心配に絶へないだらう。

子供の天才くらべ

農業と牧畜のさかんなハンガリー國はいまドイツと大變仲よしになつてゐますが、最近首府のブダペストで生れてまだ五ケ月にしかならないヴエラ・クラインといふ名前の可愛い嬢ちやんが母さんやをちさん達といろ〳〵なお話ができて、發音もしつかりしてゐるといふので大變な評判です。

このお嬢さんは生れて四ケ月目からお喋りをはじめたので、小兒科のお醫者さんもびつくりしてをられるさうです。さつそく通信社から寫眞をとりに訪問しますとお喋り赤ちやんは母さんに抱かれ、大きい目をパチクリさせてレンズにをさまりました。

◇

またアラビアンナイトでおなじみのバグダットにたつた六つの天才少年が現れました。この少年は僅か十ケ月の勉強で小學校と中學校の課程をすませ、あとはひとりでむづかしい本をどん〳〵讀んで行くので、住民の大學が文盲の土地だけに、みんなびつくりしてゐますが、少年が特に上手なのは複雑な數の計算で「生きた計算機」といふアダ名まで貰つてゐるさうです。

童話 風の中の子供 (31)

坪田譲治

おひる前、門前に重い車輪の音が聞えた。三平と善太が飛び出した。赤澤銑二が執達吏と一緒に立つてゐる。側に馬力を引いた馬がとまつてゐる。

「大變だ！」

二人は顔色を變へた。お母さんに知らさなければならない。が、さうはゆかない。馬力の後に金太郎達五六人の子供がゐて、一齊に三平を見てゐるのである。これが捨てゝ置けようか。

「何だい。何しに來たんだい。」

いふところであるが、三平はさうはいはない。逸る心を押ししづめ、平氣な顔をしてみんなの方へ歩いて行く。金太郎は今日、何故か、すまなさうな厭な眼をして話しかけた。

「三平チャン、遊ばない？」

「ウン。」

お調子ものゝ銀二郎が直ぐ側に來て話しかける。

「三平チャン、ボク達、今日オリンピックやるんだぜ」

「なあんだい、オリンピックかあ。ボクなんか、もう先の先やつちやつたあい。」

三平はかう先手をうつた。

「三段跳びだぜ。」

「あ、あ、」

「棒高跳びだぜ。」

「あ、あ。」

「障碍つていふのあるんだぜ。」

「知つてらあい。」

「走り幅跳びは？」

「そんなん、ボクなんか、何度もやつてらあ。」

「木登り戰爭は？」

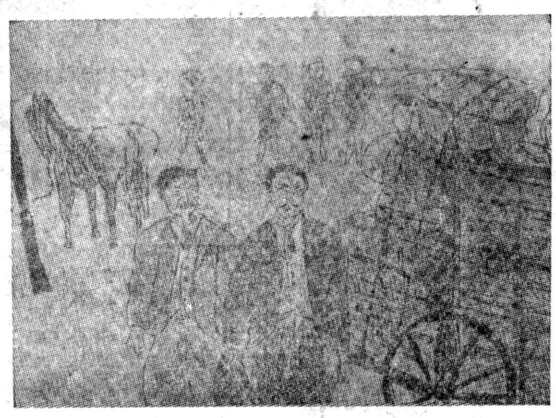
「何だい。木登りなんか。ボクんちの兄チャン、このあいだ片手で柿の木に登つたんだぜ。」

「片手で？」

「ああ。」

「嘘だあい。」

銀二郎には納得出來ない。



みんなの評議にかける。

「ね、金チャン、片手の木登りなんか、誰にだつて出來ないやねえ。」

金太郎は答へない。みんなも互に顔を見合せる。首を傾けるものもある。

「ねえ、出來ないやねえ」

みんなの前に行き、銀二郎は「ねえ！」で大きくうなづいて見せ、一々賛成を求めて廻る。みんなうなづき返してゐる。

「出來らい。」

三平は斷然大聲でいつて見せなければならなかつた。と鯉一がみんなの中から出て、三平につめ寄つて來た。

「ちや、やつて見せろ。お宮の杉の木に登つて見せろ」

「ああ登つて見せる。」

「直ぐ登つて見せろ。」

「直ぐ登つて見せる。」

みんなは顔を見合つたまゝお宮の方へ歩き出した。どうも少し言過ぎた——と、その時三平は思つたのである。そこで、善太の意向を知りたいと、後を振り返つた。善太はゐない。家の中に入つてるらしい。が、今さら後へ引けない。

家は大變なことになつたらしい。が、今さら後へ引けない成行きである。三平はいひつづける。

「登つてやる。登つてやるから、お宮の杉の木持つて來い。今直ぐこゝへ持つて來いよ。」

これを聞くと、行きかゝつた子供らは立ち止つた。

「やつぱり、三平チャンよう登らないんだよ。」

「登らあい。ちや、行つて登つてやらあ。」

三平は歩き出した。どんなにしてでも、片手で杉の木に登つて見せようと決心したのである。

算術

（ジン二）

2×1=2　2×6=12
2×2=4　2×7=14
2×3=6　2×8=16
2×4=8　2×9=18
2×5=10

コレヲ　ナンベンモヨンデ　オボエナサイ

（ジン三）

イ）花子サンノ學校デ運動會ヲ行ヒマシタ、縱ニ125人ト横ニ46人ナラビマシタ、セイトハミンナデ幾人デセウカ

ロ）969×9=
145×32=
282×43=
487×36=
346×205=

（ジン四）

正男君ノ家ニオ米ガ1500キロ有リマシタ、60キロノ俵ニツメマスト幾俵出來ルデセウカ

（ジン五）

太郎君ノ家デ或ル日棉ヲツンダノヲ計リマスト、25アロバト12キロアリマシタツンダ棉ハ幾キロアリマシタデセウカ。1アロバ、15キロデス

（ジン六）

$\frac{1}{5}+\frac{1}{7}+\frac{1}{8}=$

$\frac{5}{6}+\frac{2}{7}+\frac{3}{4}=$

$\frac{11}{12}-\frac{1}{7}-\frac{1}{3}=$

$1-\frac{4}{9}-\frac{1}{7}=$

$\frac{8}{13}\times\frac{3}{4}=$

$\frac{8}{21}\div\frac{2}{7}=$

先週ノ答

（ジン二）

イ）27＋34＝61……答

ロ）334—81＝303　245—36＝209
400—47＝363　532—29＝503

（ジン三）

43—16＝27……答

（ジン四）

100cm÷4＝25cm　……答
10161÷13＝781……餘7
48792÷57＝856
6765÷123＝55

（ジン五）

35cm×35cm＝1225平方cm
28cm×34cm＝1032平方cm
1225平方cm—1032平方cm
＝193平方cm正方形大　……答

（ジン六）

509,000×0,06＝30,000　……答

白白室

（ジン一）

ウシトマ
ウシトウマ

＝うさぎ＝

（ジン二）

（一）う、さ、ぎ、か、お、が、に、す、よ、ら、こ、で、ぴ、ね、ま、ど、

＝あたらしいど＝

（二）白い、お耳、長い、目、赤い、出す

カンジニモカナヲツケマシタカラ
ナンベンモヨミ、カイテレンシュウシナサイ

（ジン三）

＝日本三景＝

新出文字
乘つて＝ノつて
砂　スナ
橋　ハシ

讀替文字

景色　ケシキ
大小　ダイショウ
海上　カイジョウ
見物　ケンブツ
東北　トウホク
社殿　シャデン
滿ち　ミち
社前　シャゼン

新出文字、讀替文字にカナをつけてありますから、なんべんもよみ、かいてれんしゅうしなさい、來週の土曜日には多くさん練習問題を出します

笑ノ話

支那兵は臆病

小母さん「田征中の兄さんから便りあつて？太郎さん。」

太郎「うん。兄さんが斥候に出たらね、途中で敵兵五人と出あつたんだつて。兄さんはたちまちその一人を斃ちたほしたのさ。後に敵は幾人ゐると思ふ。小母さん？」

小母さん「四人ぢやないの。」

太郎「うゝん。一人もゐないんだつて。」

小母さん「あらどうして？」

太郎「殘りはみな逃げちやつたのさ。」